注連縄に見立てた綱を腰に締め、柏手を打つ。
相撲は「心・技・体」を鍛錬し
礼儀作法を重んじる日本古来の神事です。
伊勢神宮崇敬会では発足間もない頃より
毎春、大相撲を神宮へ奉納しています。

神宮相撲場での幕内力士トーナメント。

特集 神宮奉納大相撲

内宮神苑の桜がほころび始める頃、宇治橋のたもとに「神宮奉納大相撲」の幟がはためきます。

伊勢神宮崇敬会では昭和二十八年の発足（当時は伊勢神宮奉賛会）以来、神宮の奉賛をはじめ国技や芸能の振興に寄与するさまざまな活動を行ってきました。なかでも最も歴史ある事業が、昭和三十年春にはじまり、平成二十九年で第六十二回を数えた神宮奉納大相撲です。

六十三回目の春を前に、奉納相撲の歴史や見どころをご紹介します。

宇治橋前に立つ幟。

日本古来の神事

相撲は『古事記』にも「力士」の記載が見られるように、日本で最も古い武芸で、五穀豊穣を願う神事とされていました。対戦の前には土俵を塩で浄め、土中の邪気を祓うため四股を踏み、行司が持つ軍配には「天下泰平」の文字が。

ゆえにほかの競技と比べて礼儀作法が厳しく、昔ながらの髪型や四股名（力士名）、生活様式が今も守られています。

奈良・平安期には宮中の行事として相撲節会（すまいのせちえ）が開かれ、これが現在の天覧相撲につながっています。武家の台頭とともに格闘技としての色合いを強め、戦国武将はこぞって相撲を奨励。戦乱のない江戸時代には興行化し、各地で勧進相撲が開かれるようになりました。

文明開化とともに伝統芸能の多くは衰退しますが、明治天皇が度々天覧されたため相撲は命脈を保ち、大正十四年には幕内最高優勝者に天皇賜杯が下賜されるように。東京大角力（すもう）協会は大日本相撲協会と改称。後に大阪大角力協会と合併し、現在の日本相撲協会となりました。

国技を通じて心技体を鍛える

伊勢神宮崇敬会では設立当初から、青少年の心技体を鍛え、健全育成するスポーツ施設を持ちたいと構想。特にスポーツの代表格であり、国技の大相撲を神宮に奉納したいとの思いが強くありました。テレビのない時代、野球やサッカーはまだ国民的な人気を集めておらず、相撲人気は絶大でした。

佐藤尚武本会初代会長が日本相撲協会の出羽海理事長に相談したところ、「神話に起源を持つ相撲を日本の祖神である天照大御神の御前に奉納できるのは願ってもない」と共催を快諾いただき、昼夜兼行の突貫工事で神宮相撲場の建設に着手。昭和三十年二月、神宮会館裏手の高台に完成した相撲場で三月一日、第一回神宮奉納大相撲が開催されました。

当日は、佐藤会長、出羽海理事長をはじめ栃錦、鏡里ら四横綱と役員らが揃って両宮を御垣内参拝。内宮神苑で手数入

宇治橋に鬢付け油の甘い風

1／神宮会館駐車場の屋上に組まれた櫓で、近隣に大相撲の開始を告げる触れ太鼓。
2／先乗りして半紙に力士名を書くのは行司の仕事。3人1組で各巡業地をめぐる。
3／土俵作りは呼出の役目。新しい俵をめぐらし、タコ、タタキ、トンボなどの道具で土を固める。
4／大相撲奉納に先立って、親方衆、横綱、大関が紋付袴姿で外宮、内宮を参拝する。
5／内宮神苑での手数入奉納に向かう横綱をカメラに収めようと待ち構えるファン。

1／相撲の禁じ手をコミカルに演技する初切（しょっきり）。能に例えるなら狂言のような演目で、巡業ならではの楽しみ。
2／呼出による櫓太鼓の打ち分け披露。開始に向けた高揚感や、終了後テンテンバラバラ会場を後にするさまを見事なバチさばきで表現。相撲中継のBGMでおなじみの音色。
3／幕内力士土俵入り。赤ちゃんを抱いたり、小さな子の手を引いたり、本場所では見られない和やかなムードに包まれる。
4／相撲甚句。七五調の囃子歌で、季節感や巡業地に合わせた挨拶的な意味合いがある。皆いい喉で、聞き惚れる。
5／横綱土俵入を披露する白鵬。横綱だけが巻く綱は注連縄に通じており、柏手を打つ所作とともに土俵の邪気を祓う意味がある。

を奉納した横綱は、特設櫓から力餅撒きを行いました。

晴天とあって、一万人余を収容する相撲場は早朝より遠近から訪れたファンで大変なにぎわい。二部制で行われたトーナメント戦は、第一部を若ノ海、第二部は鏡里が制し、佐佐木大宮司から優勝旛（ばん）、優勝杯が授与されました。

神宮相撲場は、二年後に大屋根が付けられ、平成五年には道路や観客席を整備、第六十二回神宮式年遷宮前年の二十四年に、観客席を覆う屋根と屋形を備えた現在の姿となりました。

両宮参拝と手数入奉納

神宮奉納大相撲が行われるのは、三月の大阪場所千秋楽の翌日曜（第六十三回は四月一日予定）。

力士が来勢するのは前日ですが、大相撲を支える行司や呼出（よびだし）などは数日前に先乗りし、取組表を書いたり、土俵作りなどの準備にあたります。年六度の本場所のほかに、春夏秋冬で各二十ほどの地方巡業が行われるので、年中旅をしているようとおっしゃっていました。

神宮会館の屋上からにぎやかな櫓太鼓（やぐらだいこ）の音が聞こえると、いよいよ当日。

朝八時半、神宮会館前にズラッと車両が並び、紋付袴姿の日本相撲協会理事長をはじめ、親方衆と横綱、大関が乗り込んでいきます。まずは外宮へ、つづいて内宮を参拝するのです。

内宮参拝を終えた横綱は、宇治橋前のテントで化粧廻し姿になり、露払（つゆはらい）、太刀持（たちもち）を従え、三役力士らとともに宇治橋を渡り、ふたたび神苑へ。大宮司、少宮司、協会役員らが見守る中、まずは三役力士が大御前に土俵入を奉納。つづいて横綱が手数入（てすいり）（土俵入）を奉納します。

横綱だけが腰に巻く廻しは注連縄と同じ意味があり、不知火（しらぬい）型、雲竜（うんりゅう）型がある土俵入の所作は、神への祈願宣誓と、立ち合いの基本動作を表現しています。

白熱の幕内力士トーナメント

いっぽう神宮相撲場では、午前七時から稽古相撲、少年力士稽古相撲、幕下力士の取組などが順次行われ、時間経過とともに客席が埋まっていきます。

幕内を狙う十両力士の力のこもった取組もありますが、七五調の節回しが独特な相撲甚句（じんく）、見事なバチさばきで会場の様子を表わす櫓太鼓の打ち分け、コミカルに相撲の禁じ手を演じる初切（しょっきり）の披露など、本場所では見られない演目も巡業ならではの楽しみ。

午後、お待ちかねの幕内力士トーナメントがはじまります。

東西に分かれて選士が入場すると、まずは国歌斉唱。つづいて本会会長の式辞、神宮大宮司、日本相撲協会理事長の挨拶、力士代表による選士宣誓が行われ、優勝旛が前年優勝力士から返還されると、いよいよ熱戦がスタート…。

大相撲を間近でご覧になったことがない方は、ぜひ迫力を味わってください。

神宮奉納の歴史を刻み続ける

1／幕内力士トーナメント開会式。国歌斉唱につづいて日本相撲協会理事長、神宮大宮司らの挨拶、選士宣誓が行われる。土俵中央で本会会長に代わり挨拶する髙城理事長。
2／結びの一番（優勝決定戦）後に披露される弓取式。
3／熱戦が繰り広げられる幕内力士トーナメント。優勝者には優勝旛のほか神宮、本会などから記念品が贈られる。
4／第1回（昭和30年3月）で横綱土俵入を奉納する栃錦。
5／平成25年の第58回では、第62回神宮式年遷宮を奉祝して横綱白鵬の綱締めが披露された。